

『#ジャッカルの日』（フレデリック・フォーサイス著）を再読してみた。著者は、英国の小説家。空軍パイロットを経て、ロイター通信社に入社、1968年にフリーのルポライター。1971年発表の本書で一躍有名になり（エドガー賞受賞）、その後「オデッサ・ファイル」（1972年）、「戦争の犬たち」（1974年）を出版、いずれも映画化された。

（粗筋が最後まで記載されているので、本書を読むつもりの方は読了後に参照されたい）。

舞台は1960年代のフランス。このころド・ゴール大統領暗殺未遂が数件続いていた（フランス植民地アルジェリアへのド・ゴールの対応に様々な軍事組織が不満を募らせていたため）。その実際にあった事件に虚構（フリーランスの暗殺者）を入れこんだ小説が本書である。

武装組織（OAS）が雇った「ジャッカル」と名乗る暗殺者と、暗殺を阻止しようとするフランス官憲の追跡を描いている。著者はパリにロイターの海外特派員として駐在しており、大統領の警護隊員など多くの情報源から様々な情報を得て、本作を思いついたという（OASのメンバーほぼ全員の身元や動向や組織の計画がすべて筒抜けになっていることで、OASが組織外のフリーランスの暗殺者を雇って立案から実行までのすべてを任せる案を思いついた）。後年の暗殺者の中にも本書を愛読した者も多いそうだ。1973年、映画化されている（フレッド・ジンネマン監督）。

本書は陰謀の解剖学、追跡の解剖学、暗殺の解剖学という3章からなる。陰謀編が本書の半分を占めるが、この緻密さが興味深い。

1963年、暗殺の失敗（OAS内部の動きを官憲に察知されているため）が続き、OAS組織はもはや壊滅状態となり、組織外からプロの暗殺者を雇うことを決め、目的遂行に一人の英国人男性を選ぶ（コードネームは「ジャッカル」）。当時としては法外な報酬50万ドル（前金25万ドル、成功後25万ドル）を要求された。金欠のOASは組織を挙げてフランス各地で銀行などを襲い資金を集める。一方ジャッカルはド・ゴールの資料を徹底的に調査し、一年のうちに一度だけ、ド・ゴールが必ず群衆の前に姿を見せる日があることを発見してそこを暗殺決行日と決めた。ジャッカルはいくつかの候補地から決行地点を選び、全ヨーロッパを移動しながら必要な特注の狙撃銃、偽造の身分、偽のパスポート、衣装や小道具、入出国経路などを抜かりなく用意する。

一方でフランス官憲は、OAS 幹部のボディガードを拉致・拷問して外部の殺し屋「ジャッカル」を雇ったことを知る。指揮は経験豊富なルベル警視に一任された。治安組織の官僚たちに定期的な捜査報告を行うことを求められ、権力者達の政治的思惑を受けながらも、ジャッカルを追い始める。世界中の警察に問い合わせで、不審な英国人男性のチャールズ・カルスロップが捜査線に浮上する（“Charles Calthrop”を縮めた“cha-cal”がフランス語でジャッカルという意味になる）。英国からの情報を元にルベル警視はフランス全土の警察を指揮して不審者の入国を水際で阻止しようとするが、ジャッカルは偽名のパスポートを用いて（3部）既に南フランスから国内に侵入していた。

ルベル警視は何度か追い詰めるが、ジャッカルはいつも寸前で逃げ出して変装を変え、時にはホテル以外の宿泊場所を得るなどしてパリを目指す。ルベル警視の定例捜査報告会の内容がジャッカルに筒抜けになっており、出席者の電話盗聴から機密情報を漏らしていた官僚を突き止めて報告会から追放する。また、ド・ゴール暗殺の決行日がいつであるかを直感する。

捜査を掻い潜ってジャッカルはついにパリに入り、再び容姿を変えて潜伏する。パリでの大ローラー作戦でも発見されず、人相を公表して公開捜査に踏み切る。しかしジャッカルは見つからない。ド・ゴール大統領は、暗殺の危険を訴える側近の声に耳を貸さず、例年通りパリ市内で行われる式典に出席した。ジャッカルとルベル警視の対決は、ド・ゴールが姿を現すその時間、その場所にまでもつれこむ。

8月25日のパリ解放記念式典の日、ジャッカルは老いた松葉杖の傷痍軍人に成り済まし、広場を見渡せるアパート最上階の部屋を狙撃の場として確保した。当日、勲章の授与を行うド・ゴール大統領の頭部を狙撃するが、ド・ゴールが身をかがめたこと（英国にはないフランス特有の儀式）で弾丸は外れた。その直後、ジャッカルはルベル警視に撃たれて死亡したが、暗殺未遂のことは伏せられた。

その後ジャッカルの本名だと目されていたチャールズ・カルスロップは、別人であったことが判明した（その素性は謎のまま）。ジャッカルは射殺体はひき逃げ事故に逢った身元不明の外国人旅行者として翌日パリ市内に葬られ、ルベル警視はその埋葬を見届けた。

再読する前は、ジャッカルが危機一髪で逃げるイメージと最後の狙撃を外す場面しか覚えていなかったが、そんなところよりも最初の「陰謀の解剖学」が大変緻密に OAS と官憲の計画や行動が記述されており、読み飛ばすことができない。

かった。文庫解説者はこれまで傑作とされた『マンチュリアン・キャンディット』（R・コンドン）や『寒い国から帰ってきたスパイ』（ル・カレ）など本書に比べたら子供だましに過ぎないと述べている。古典も悪くない。『戦争の犬たち（上）（下）』、『オデッサ・ファイル』も読んでみよう。